

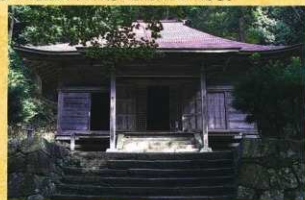
中世は金勝寺が最も栄えた時期であり、本堂以外にも36の坊院群が作られた。坊院群は主に谷部に作られ、谷を単位とする寺院組織（谷組織）を形成した。『興福寺別院金勝寺図説』には北・中・東・西・南谷の名称が見られる。

こうした谷組織は武力を持つことが多く、南北朝時代の動乱にあたって、金勝寺も一時「金勝寺城」呼ばれて城塞化したこともあったといわれる。

近世の金勝寺

金勝寺は戦国時代の1548年に再び焼失したため、1549年から再興のための勧進が行われるようになった。しかし、昔の勢力を取り戻すことはなく、本堂周辺の再建に止まった。

現在の本堂、仁王門は元禄年間（1688～1704）頃の再建で、駐車場から本堂に続く石垣は1674年に築かれている。本堂の西側には鎮守社の日吉神社や十二所神社があったが、現在は建物が見られ礎石を残すのみである。



金勝寺本堂

寄り道しよう（周辺の史跡）

狛坂寺跡・狛坂磨崖仏

狛坂寺は平安時代の816年に願安が、当時女人禁制であった金勝寺に代わって観音信仰の霊場として建立したとされる金勝寺の別院である。

竜王山から狛坂寺の間には、磐座と思われる巨石や中世に作られた磨崖仏が点在しており、現在のハイキングコースが山林修行のルートに重なることがわかる。狛坂寺は明治時代に廃寺となり、現在は石垣を残すのみとなっている。

その境内には奈良時代後期の作とされる国指定史跡の狛坂磨崖仏がある。中央に如来（像高276cm）を、両脇に菩薩を配すが、尊名は特定できない。

西・東並木道

北側山麓に鎮座する大野神社を起点として、金勝寺に至る二本の参詣道は、東・西並木道とよばれ、かつては並木や石製の丁石が多数見られた。丁石は山麓から本堂までの距離を刻んだもので、金勝寺では西並木道沿いに不動明王と共に刻まれた二十九丁石（廿九丁と刻まれている）が現地に残る。



国指定史跡 狛坂磨崖仏

こんぜの里から金勝寺に至る林道はかつての東並木道で、石製の道標が残されている。



西並木道にある二十九丁石



金勝寺に行くには……

- JR東海道本線早津駅・東東駅から、帝産湖南交通バス金勝公民館行きで終点下車（所要35分）。そこからリチャンプバス（タクシー）の金勝磨崖仏・成谷行きに乗り換え、成谷で下車（所要10分）。徒歩約1時間。
※リチャンプバスは予約が必要（TEL077-558-2911）
- 名神高速道路東インターチェンジから車で約30分。

ハイキングの注意

- ①ゴミは必ずお持ち帰りください。
- ②山内には、滑りやすい所もありますので、足元に注意し、歩きやすい服装や靴を着用してください。
- ③金勝寺への拝観は別途、拝観料（入山料）が必要です。

発行 栗東市教育委員会
栗東市出土文化財センター
財団法人 栗東市体育協会

滋賀県 栗東市 遺跡めぐりマップvol. 2

金勝寺

金勝地区



興福寺別院金勝寺図略（江戸時代）



二月堂の尊光院明王立像（平安時代）

金勝寺の歴史と遺構

金勝寺は栗東市の南部に位置する山岳寺院で、金勝山の山中に伽藍を構えている。金勝山は信楽（甲賀市）や田上（大津市）の山系につらなる「湖南アルプス」の一角を占める。この山系は阿星山を中心とする霊場群（阿星寺跡・長寺寺・西寺）や竜王山・狛坂寺といった古代からの霊場群を抱えており、金勝寺はそれらの中心的存在であったとされる。

古代の金勝寺

金勝寺は、奈良時代の733年に聖武天皇の命令で、良井が開基したといわれている。

良井は東大寺（奈良県）の初代別当を務めた高僧であるが、良井が金勝寺を開基した理由は、紫雲山（甲賀市）の鬼門を守るという理由の他に、東大寺や興福寺といった奈良の寺院勢力が、寺院建立の良材を求めて、近江南部に進出したことが背景にあげられる。

平安時代には、興福寺の願安が山林修行の霊場として中興したことをきっかけに、833年に定額寺となり、897年には僧侶の試験を行う（年分度者）機関となり、本格的に伽藍が整備されるようになった。

1985年に行われた発掘調査によって、大講堂などの存在が明らかとなり、「金勝寺四至絵図」に描かれた大講堂や三重塔、多くの僧侶を構える大寺院に成長し、近江南部の主導的地位を獲得していった。



金勝寺の古代伽藍（金勝寺四至絵図、桃山時代）

中世の金勝寺

平安時代中期の11世紀初めになると、奈良の仏教勢力に替わって比叡山の天台勢力が近江南部にも進出する。金勝寺もその傘下に入り、法相宗から天台宗に転換していった。このため金勝寺に向かう参詣道も奈良・信楽方面を向く南方面の大鳥居に換わり、東・西並木道といった北方面が重視されていった。

金勝寺は1185年に火災に遭い、伽藍の大部分が焼失したが、大講堂などが再建、この他、法華堂・常行堂・二月堂も建立されていた。



坊院跡の平坦地

坊院跡の土塁

発掘された金勝寺

本堂の西側山腹では、1985年に大規模な発掘調査が行われ、古代に作られた大講堂跡などが確認された。

①大講堂

南北32m×東西26mの基壇の上に、8×6間分の規模を持つ礎石列が確認された。長屋風の構造から「金勝寺四至絵図」に描かれた大講堂と推定されている。出土遺物により8世紀後半～9世紀前半頃に建立され、13世紀以降には建物が発見されることが判明した。



発掘された講堂跡

②虚空蔵堂の地下遺構

現在、虚空蔵堂が建つ地点でも発掘調査が実施され、南側に張り出しを持つ8×9mの基壇と、その上面で3×3間分の礎石が確認された。出土遺物により8世紀後半から10世紀前半に機能したことが明らかとなった。発掘された遺構は平安時代の本格的な伽藍建立にあわせて整備されたことが判明したが、遺構の性格は不明である。



発掘された虚空蔵堂地下の遺構



虚空蔵菩薩菩薩半身像（平安時代）

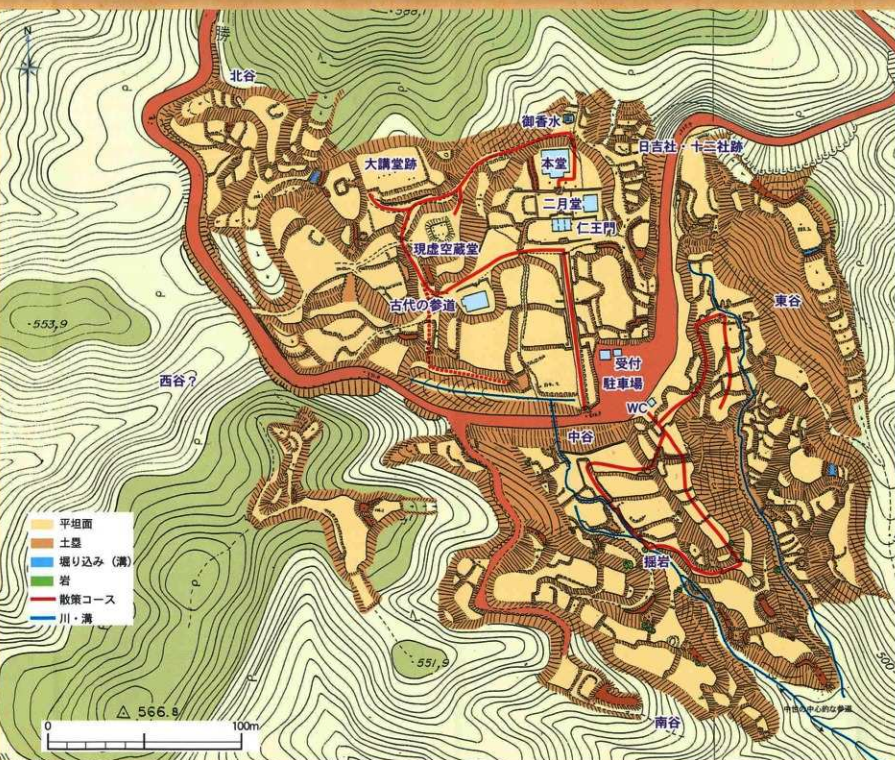
遺構に見る金勝寺の変遷

古代 現本堂の西側にあった古代の伽藍は、『金勝寺四至絵図』によると、大講堂を奥に設け、周囲に三重塔を配している。塔跡の位置は確定できないが、現地を見る限り、大講堂跡の西側が、虚空蔵堂の地下遺構にあたるものと思われる。

これらは大講堂の正面から南に向かって延びる直線道路（古代の参道）を軸に配置されている。このため古代の金勝寺は、平地寺院によく似た東西南北の軸線を意識した規格化された伽藍配置を持っており、律令制の下で建立された山寺であったことが理解できる。

中世 古代の伽藍は13世紀頃に廃絶し、寺院の中心は現本堂周辺に移動する。中世には、古代のような規格化された伽藍配置は崩れたが、谷部に坊院群が作られ、寺域が緩やかに拡大する。寺内には36の坊院群があったが、谷ごとに平坦面の形状が異なっている。例えば金勝寺の中心と考えた中谷では、寺院の中心的な参道に沿って大規模な方形区画が連続して作られている。しかし、中心的な参道から離れた東谷の山腹部では、半円形の小規模な平坦面が分布している。このため、金勝寺は寺内や谷組の間に多様な身分・勢力差を抱えていたことがわかる。

近世 戦国時代に多くの建物が発見され、金勝寺の寺勢は衰えを見せる。このため伽藍は現本堂から駐馬場付近を中心に整備されるようになり、坊院群の多くは廃絶していったと思われる。石垣は中世のように自然石を低く積み上げたり積み上げたり、切石を積み上げたものに変化する。切石積みのお石は、駐車場から仁王門の間に見られ、1974年に作られた。



東谷の隆興と阿弥陀寺

室町時代に今の栗東市川辺で生まれた隆興は、比叡山や金勝寺で修行中、念仏を活動の軸とする浄土教の教えに傾倒した。金勝寺東谷浄取峰を拠点に活動していたが、1413年に草庵（後の阿弥陀寺）を構えた。

阿弥陀寺は室町時代を通じて近江浄土教の総本山として隆盛を極めたが、織田信長によって安土城下に浄取峰として機能の大部分が移り、総本山の地位を譲った。



東谷の平坦面



東谷の石垣

本堂

戦国時代に焼失した本堂に替わって、江戸時代の元禄年間（1688～1704）に建てられたとされている。屋根は寄棟造で、室内には本尊の釈迦如来坐像や良弁、願安の像を安置している。



良弁僧正坐像



願安坐像

御香水

この井戸から汲みあげた水を、六角形に削った竹筒に入れ、巻数と共に毎年正月十五日に京都の宮中に献上していた。

献上の開始時期

は定かでないが、戦国時代には記録があり、由緒ある雪水として知られていた。



御香水

掘岩

大鳥居・大戸川（大津市）方面から北上する旧参道をふさぐように立つ大岩で「動石」とも呼ばれていた。いつからここにあったか定かでないが、江戸時代には「十人力にても動かざる岩、たゞ一指に押すに安く動く」名物岩として知られていた。



現在の掘岩



掘岩（『東海道名所図会』より）